



## 「話して、気持ちすっきり」を目指して



令和5年度は、感染症に係る制約が緩和され、学校の教育活動も以前の姿に戻ってきました。しかし、1月には能登半島で震災が起きるなど、子どもたちや教職員、保護者の皆さんの心のストレスは、多様化し、複雑化し、継続しているのではないかと考えています。地震については、時間とともに記憶や感覚が薄らいでいるように思えますが、今後も丁寧に様子を見守り励ましていくことが大切であると感じています。

さて、「カウンセリングを受けると心がすっきりするよ。」とよく言われます。カウンセラーに、自分の悩みや不安を話すことで、自分の行動や環境を振り返りながら考え、悩みや不安を整理することができるからです。しかし、年齢が進むにつれ、周りの空気を読むことが上手になり、自分を抑えて本当の自分を表現することが難しくなっているように思います。そこで、丁寧に話を聴くために次のようなことに心がけています。



- 聴くための時間をつくり、余裕をもって話を聴く
- 間が空いても、話を最後まで聴く
- 相手の立場に立ち、共感的に対応する



不安や悩みの本質は、思うように表現できないものであることが多いようです。質問の仕方によってはカウンセラー自身が判断や誘導しているように相談者に感じさせてしまいます。そこで、相談者の話を丁寧に最後まで聴き、言葉が出てくるために全てを受け入れることを大切にします。そのうえで、事実を確認したり、整理したりするようにしています。相談室の環境を整え、少しでもリラックスして話ができるようにし、これからも耳ではなく心でしっかり声を聴いていきたいと考えています。

4月は、子どもたちにとって希望と不安の連続です。毎日、楽しく学校生活を送れるように、子どもたちや教職員、保護者の皆さんの心の安定につながるように、学校訪問カウンセラーとして、学校の教育相談や生徒指導を側面から支援したいと考えています。「お話に来てくれて、ありがとうございます。最後まで聴きますね。」と出迎え、「そうですね、がんばっているんですね。」と気持ちに寄り添っていきたいと思います。そして、「不安が少しになると嬉しいです。」「応援していますよ。」と送り出すような心の通った相談活動を今後も目指していきたいと思います。

(文責 学校訪問カウンセラー 宮澤)



「所報」は、教育センターのホームページでも公開しています。ご覧ください。



# 特別支援学級に在籍する児童生徒への対応

## ～特別の教育課程の編成と効果的な交流及び共同学習について～

### 【特別の教育課程の編成について】

特別支援学級では、在籍する児童生徒の実態に合わせて、特別の教育課程を編成して指導することができ、次のようなことが可能となります。

①各教科の内容…下学年の内容や特別支援学校の内容に替えることができます。

②授業時数…各教科・領域等の授業時数は、弾力的な取扱いができます。

③教科用図書

当該学年の教科書に代えて、文科省著作教科書や一般図書を使用することができます。

教科書センターで文科省著作教科書(☆本)を閲覧することができます。



④各教科等を合わせた指導

「日常生活の指導」「生活単元学習」「作業学習」など、学校生活の中で実際に体験しながら学習を行います。



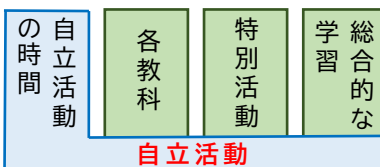
日常生活の指導



生活単元学習

⑤自立活動の指導

将来自立した生活をするために必要な力を付ける自立活動の指導を、学校生活全体を通じて行います。

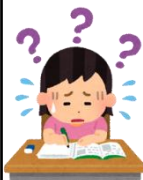


### 【効果的な交流及び共同学習について】

交流及び共同学習は、障害のある児童生徒と障害のない児童生徒が交流し、共に学ぶことを通して、豊かな人間性を育み、お互いを尊重し合う大切さを学ぶ機会となる時間です。ただし、特別支援学級に在籍している児童生徒が、授業内容が分かり学習活動に参加している実感や達成感をもてるようにすることが大切です。実態を考慮しない、画一的な交流及び共同学習にならないように以下のような配慮が必要です。

授業内容が実態に合っていますか

そもそも授業内容が、特別支援学級の子どもが理解できるものなのか検討が必要です。単に「国語と算数以外は交流学級で行う」ではなく、必要に応じて特別支援学級で子どもの実態に合った学習をしてください。



合理的配慮がなされていますか

一人一人の特性に合わせた合理的配慮(「教科書にルビをふる」、「ICT機器を活用する」など)を行うことが大切です。



国立特別支援教育総合研究所の合理的配慮実践事例データベースも参考にしてください。

実態に合った目標を設定していますか

実態に合った目標を設定し、児童生徒とも到達目標を共通理解することが大切です。実態に応じた目標が設定されていないと、他の友達と比較して自己肯定感が下がってしまうことがあります。



交流学級担任と情報を共有していますか

効果的な学習になるよう、特別支援学級の担任と交流学級の担任が情報を共有することが大切です。その際には是非「個別の指導計画」を活用してください。





～子どもとの信頼関係が土台にあること～

## 好意に満ちたかかわりと言葉掛けが、教師と子ども、保護者を繋ぐ

通常の学級には、「教師にとって気になる子」が必ずいます。制度上の特別支援教育の対象には入らない子どもも多く含まれます。多様な子どもたちを通常の学級の中で支援していくことに苦慮している先生方も多いことでしょう。

支援策とともに、今一度もっと根本である教師と子どもとの関係をじっくり見つめることを大切にしてほしいと考えています。「あの子は通級の子、あの子は特別支援学級の子」だからという眼（見かた）ではなく『クラスの一員』という眼をもつと、教師のかかわり方や言葉掛けが変わってきます。「障害があるから参加ができない」と障害を要因にするのではなく、「どんな授業づくりをしてどんな支援があると参加ができるのか」という視点をもてるようになります。このような視点が、通常の学級での「合理的配慮」に繋がっていくのです。（文部科学省：共生社会の形成に向けて）

そして、教師は、子ども自身が困りごとを誰かに伝えられるような学級づくりや人間関係づくりを心掛けることが大切です。



### 好意に満ちたかかわりや言葉掛け

- ① 褒める…「もう取り掛かっているね、えらい」
- ② 励ます…「あと少しだね、がんばれ」
- ③ 気付く…「ぞうきを丁寧に掛けているね」
- ④ 感謝する…「あの時、助かったよ、ありがとう」
- ⑤ 興味や関心を示す…「〇〇をしたんだね」
- ⑥ ヒントを出す…「～だったね。よく思い出したね」
- ⑦ 微笑む…目を合わせて 笑顔で OK サイン  
「明日も待っているよ」と握手
- ⑧ 価値付ける…「気持ちを切り替えられることは、テストで 100 点と同じくらいすごいこと」 など

その子に対する教師のかかわり方や言葉掛けは、周りの子どもたちが見たり聞いたりしています。教師の見方や姿勢を子どもたちなりにキャッチし、善いことと感じると、かかわり方を真似するようになります。そうすると子ども同士が繋がっていくようになり、温かい学級集団に近づいていきます。



子どもは、一日の出来事を家庭で話します。「先生がそっと褒めてくれたよ」「今日〇〇さんが泣いていたけれど先生が励ましていたよ」など…。学級経営や授業づくりとともに、その根底に子どもの姿を肯定的に捉え、参加の方法を考えようとしている教師の子どもへの温かいまなざしや姿勢は、保護者にも伝わります。

「うまくいかないことが続くと、誰かのせいにしたくなる」のは人間の心理です。また、「これくらいよいか」と思ったことが大きな問題になることもあります。「小さなことは大きなこと」と捉え、学年間で話題にし、特別支援教育コーディネーターに相談してください。特別支援教育コーディネーターは、学級担任の困り感を受け、管理職と情報を共有します。いつ校内委員会を開き、方向性を話し合うかを調整します。また、他機関の参画を得ることで経験や専門性を補うことができ、職員一人一人の資質能力の向上にも繋がっていきます。「個別の教育支援計画」を活用しながら関係する職員で評価・改善し、次年度に引き継いでいきましょう。



このように、校内で議論し校内体制を整えていくことは、チームとしての学校づくりにもなっていきます。  
(担当 学校教育課指導主事 吉越)



# 「冬期カウンセリング研修講座で力量アップ！」



大勢の皆様からご参加いただき、ありがとうございました。講座及び感想を紹介します。

## ◆12月25日(月) 愛着障害と発達障害の理解と支援

### 講義の要点

愛着とは、「特定の人と結ぶ情緒的なこころの絆」のことで、子どもにとって「安全基地」、「安心基地」、「探索基地」の三つの基地機能がある。それらが育っていないことが愛着の問題である。愛着障害は関係性や感情発達の障害であり、発達障害としっかり峻別して理解する必要がある。「愛情の器(受けた愛情を貯めておく器)」が整っていない子どもには、それを修復する必要がある。その子を一番理解しているキーパーソンを決め、その人との関係性を基盤として支援を広げていくことが大切である。

講師 和歌山大学教育学部

米澤 好史 教授

### ◇感想

研修を受講して、愛着障害に対する知見を広げることができ、より深く学びたいという思いが強くなりました。キーパーソンを決めて、その人との関係から広げて支援していくことを学んだので、それを教師間で共有し、チームで支援できるようにしていきたいです。

## ◆12月26日(火) 学校・家庭・専門機関の連携による不登校対応

### 講義の要点

不登校児童生徒は部分登校も含めると 100 万人に達する。高い割合で引きこもりになることを考えると、児童生徒が主体的に社会的自立や学校復帰に向かうよう、適切な支援が必要である。不登校はガソリンの少ない自動車に例えられる。解決のためには、ガソリン(心的エネルギー)を入れることと、家庭と学校との道のしっかりつなげること、上手に動かすこと(専門的な技術)が必要である。不登校対応チャートを参考に、学校・家庭・専門機関が連携して段階的に支援を進めていくことが求められる。

講師 FR 教育臨床研究所

花輪 敏男 所長

### ◇感想

学校は、専門機関からアドバイスを得ながら、保護者にアドバイスをし、連携していくことが大事であると分かりました。そして、その具体的な方法も聞くことができ、自校の子どものことにあてはめながら、今度こうしてみよう、こんなこともできそうだ、などいろいろ考えることができました。

## ◆12月27日(水) 学校での児童生徒のアセスメントと支援の組み立て

### 講義の要点

学校現場で支援が必要な児童生徒に効果的な支援を行うためには、適切なアセスメントが求められる。ひとりの子どもは多様なニーズをもっていて、見る角度によってニーズの大きさが違って見えるので、子どもの多様な面をアセスメントすることが重要である。アセスメントには、理論に基づいた枠組みが有効で、認知行動療法、ポリヴェーガル理論、応用行動分析、ハイダーの法則などがある。枠組みの弱点を相互に補うためには、複数の枠組みに習熟し活用することが理想である。

講師 子育てカウンセリング・リソースポート

半田 一郎 代表

### ◇感想

アセスメントにも様々な枠組みがあり、それらを複数活用しながら、児童の困り感や支援方法を見出すことが有効だと気付きました。また、演習を通して、応用行動分析やハイダーの法則などを活用することにより、児童の困り感や問題行動の原因をより深く分析することができることを実感しました。

## 令和6年度カウンセリング研修予定

7月30日(火)	特別支援教育	上越教育大学教職大学院	関原 真紀	准教授
7月31日(水)	生徒指導	関西外国語大学	新井 肇	教授
8月1日(木)	教育相談	柏崎市子ども未来部子どもの発達支援課	小林 東	課長
12月25日(水)	学級経営	早稲田大学教育・総合科学学術院	伊佐 貢一	客員教授
12月26日(木)	不登校支援	東京家政大学・大学院	相馬 誠一	名誉教授
12月26日(木)	特別支援教育	金沢学院大学文学部教育学科	佐田東 彰	教授

※詳細については、4月上越市立教育センター「令和6年度研修案内」をご覧ください。